研究会 記録　　1960・1・19　　於 人文分館

資源論（川喜田）

Kaw　人口の分布と産業の繁栄に最も大きな影響をもつものとして、農産地帯の分布及び動力資源、特に炭田の分布について重点的に考察する。
農産地帯は云う迄もなく傾斜地よりも平野の方が有利である。気候の点では暖かい程出来が良い。また水に恵まれた方が良い。これらの分布は世界に於いて不均等で恵まれた地帯は案外少い。石炭・石油・水力を考えると水力の比重は小さいが枯渇しない。石油はシバシバ石炭より大きな比重を占めると云われるが、これは必ずしも石油産地が工業地帯になることを意味しない。個々の石油は比較的早く枯渇するし、石油の輸送は楽であるので工業を産地へ移すよりは石油を工業地へ運んだ方が有利である。そこで炭田地帯が世界での工業地帯になる。そこでアメリカ・ヨーロッパはイングランドから中部ヨーロッパを通って南ロシアにつらなる大炭田地帯、このふたつが決定的に重要だという事が出来る。この二つの地帯では人口収容力が決定的に大きい。ヨーロッパ南ロシアを通る炭田は温量も高いので農業地帯でもある、という点が特に重要である。また統計的に云うと1000億以上の炭田はこれ以外は非常に少く、特に熱帯地方は貧弱だという事は注目すべきである。更に南半球にも少い、オーストラリヤに少しある程度。南阿連邦の南に少しある。そのことからソ連は大きくなる程内陸の方へメリ込んでいかなければならないという運命にある。ここで人口収容力について二つの概念を設ける。① 相対的人口収容力　② 絶対的人口収容力。
②は資源の量で割り出せる人口収容力（農産物量など）、①は不平等な資源分布に適応し合理的な産業構成を持つことによって起る人口の割り振りのことである。そしてこれが現状なのである。この状況は工業が進む程斯うなるので昔なら農産地帯がそのまま人口分布を示していた。だから交換経済の基礎さえあれば都市の方が収容力は大きくなる。そこで大きく云えば、農業だけで人口を支える場合に比べれば、農業が工業とバランスをとっている場合には大体前者の2倍の人口を支え得る。勿論工業に多く片寄れば更に大きな密度で人口を支え得る。結局多産的な農業地帯と工業地域とが組めば最も多くの人口を支え得ると云える。ここで大きな炭田とはどの程度のスケールのものかと云えばアメリカ程度の商工業の繁栄を目やすにすれば5000億トンの埋蔵量がなければやっていけない。これだけの條件を整えているのが世界中にきわめて少いということである。この不均衡を考慮すれば transpartation が活発でなければ人口は支えられないことになる。そこで近代の輸送を考えると鉄道と海である。鉄道が始まるのがヨーロッパの産業革命とホボ同じ頃、19世紀の中頃には汽船が大量輸送に耐えるようになった、汽車も同じ。しかも水運の方が割安であるという点が重要である。此の條件と共に近代化は沿海地域から進んだと云える。また此の時にヨーロッパが平坦であることがきいてくる。必然的に内陸への近代化はおくれて発達する。アメリカ合衆国・ソ連がそうで内陸開発に伴ってようやく力を出してくる。そしておくれて発達したが為に現在かえって前途有望ということになっている。勿論内陸でも鉄道はどこでも敷くわけでないので資源の分布に沿ってでなければペイしない。シベリヤ鉄道は黒土地帯に沿って敷かれているのが好例である。アメリカの鉄道網でも北は殆んどないが、これは zone of sterility に当る。限界は35°の温量指数、これ以北は園芸的にか又は港湾附近で人が集っている為に金にイトメをつけないと云うのでなければ採算がとれない。

Ima　15°の線は森林限界で、しかも連続的にはそこまで延びていない。従って本当の人間の生産を考えれば20°とか25°を考える方がよいのでないか。

Kaw　それは賛成。

Ima　人口分布に合うような線がないか。

Hnz　45°線を入れようか。35°はハンパでないか。

Kaw　イヤ、35°が人口分布にピッタリ合っている。

35°C　Ima　環境から云えば吉良の45°が意味があるが、人間に重点を置いたら川喜田は前から35°を農業限界として取りあげてきたのだし、ワレワレの話はやはり農業が始まるという事からはじまるのだから35°を用いるのが編成論にも有効であロー。

Kaw　これが一番 clear cut にでてくる。　此のように運輸が発達したという背景のもとに何故新大陸が人口を吸収することになるかというと新大陸の資源は最も開発に適したところから始まる。従って能率が上がり、労働生産力が高くなりしかもコストが安く新大陸の方が競争力が強く相対的に好景気になり、資本が吸収されて更に多くの労働人口を吸収することになる。これによって、旧大陸から人口が出ていくという相対的の問題であって、旧大陸において絶対的に人口が過剰になったから新大陸へ人口が移るのではないことを念の為に。よくそう考える人があるが、こちらの考え方の方が正しい。ここでソ連が内陸へ延びていかざるを得なかったというのはかなり重要な意味がある。人間というものは多かれ少なかれ慣習の動物だから、アメリカやソ連のように新しく開発が進められるフロンティアを持つことがあとの発展にきいてくる。ひるがえって、世界の人口の分布を考えると、ユーラシヤに8割ほど住み特に温帯中心である。だから旧大陸では次第に資源開発いき詰まりつつある、新大陸と熱帯が次のポープとなる。しかしこれには後に述べるような政治的障害がある。
人口の増加は幾何級数的にふえる。これでいくと将来70億になるだろうと人口学者は云う。ところが地域的に見ると必ずしもそうでない。大体世界は3つに分ける。① 西北ヨーロッパ　これは一番早く人口がふえた。死亡率が先に減じ、出生率と差がなくなりついで出生率も低下する。ここでは19世紀に人口増加期があって人口は停滞乃至減少の傾向を現わす。①に似たところはどこでもそうである。※合衆国・カナダ・ニュージーランド・オーストラリヤ、更に南阿連邦もそうなっていくのでないか。② 後進国ではあるが次第に先進に向いつつある。日本などこれは人口激増期にある。月々に後進国が②になりつつある。③ 超めて後進の地域、つまり南洋諸島、アフリカ等。これらは白人と接触と伝減少してきたがこれらはやがて増加期にはなるのであろう。①は人口がふえてくる時にはワレワレは優秀だから人口がふえるという、停滞してくるとアイツ等は劣等だからふえると云う。しかし人口が押されるから黄禍論などが出てくる、racism が出てくる。ヨーロッパのふえた時には世界人口の25%程度にまでふえたと思う。いまはまた15%にさがっている。後進地域は一度さがってまたあがりつつある。ここにヨーロッパが恐怖を抱く感覚的問題がある。次に都市と農村の人口の再生産力をみると都市の方がはるかに低く、都市人口は常に農村人口によって置きかえられていく。生活水準の面でいえばこれがあがりはじめの時は都市人口は非常にふえるが水準のあがりがにぶると人口増加もにぶるという傾向がある。ここで皮肉にも新大陸が人口流入をイヤがる結果、旧大陸の方も生活水準があがる余地が少くされていると云う現実が生じている。結局農業地帯より都市へ、農業地帯より工業地帯へという移動が世界的に激しいのである。この移動によって世界的に人口はバランスを保とうとするし、全体的に人口収容力はふえることになる。但し部分的には人口が移動しすぎて農業がやれなくなる地帯も生ずるかもしれないが、また部分的には工業を保護する為に交流を断絶した方がよいという立場におかれないでもない。ここに問題

Kyoto University

が生ずるのである。だから新大陸特に北米が人をひきつけた要因が二つある。ひとつは未開発の資源が開発されだしたこと。他はそれによって都市が散在するようになったということ。この工業地帯があるということが大切で農業ばかりでそれのない南米が余りアトラクティブでないのである。
以上の理由で資源と産業と交通と人口との間に密接な全体として有機的なまとまりを持つ傾向がありこれがまたひとつの地理的なものである。このsystenの中ではどれかひとつがかわれば他がそれに釣り合うようにかわる。

$S = F(p, r, i, t)$　　Sは人口支持力
S: total effect,　p: population,　r: natural resourcess
i: industry,　t: transportation

Iin　Sがそれなら函数の中にpがあるのはおかしい。
Kaw　ウン。
Iin　$p = f(r, i, t)$ ではイカンカ。
Kaw　ケッコー。此の函数的関係はきわめて当りまえのことだが、きわめて大切なのである。次に進歩というものを考える。地球上に必ずしも均一に進歩はおこなわれていない。縦軸は意味がない。横軸は地域のひろがりを示す。線は人口の量。

Fig. 1は産業の発達しない時分では地域によっての差なく、人口が一様に分布しているとする。或る地域で産業が起り人口分布或いは人口支持力に差が生ずる。(事務局註 縦軸は人口数らしい。横軸と曲線との間の面積は人口総量をあらわす。)日本のように人口totalがふえ、かつ或る地域に産業が起って人口分布にヒズミを生じた場合(事務局註 ここでは川田は縦軸が進歩のスピードをも現わしているつもりらしい説明有。

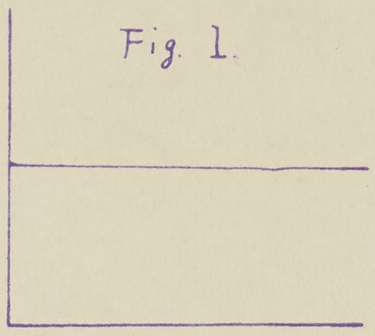
Fig. 1.

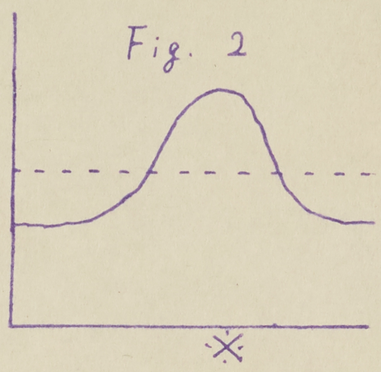
Fig. 2

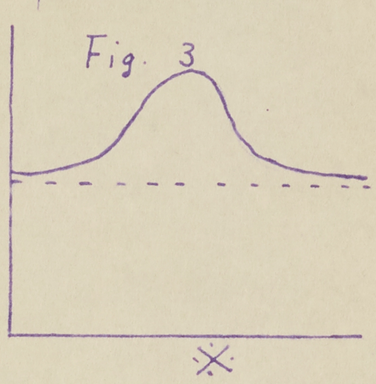
Fig. 3

Ima
Vey　世界と国の中では事情が違うのでないか。
Kaw　いまはわけない。
Huz　絶対収容力か、相対収容力かの問題か。
Kaw　相対。Fig.での※の地域はcentralizationをおこす可能性がある。進歩がひとたびおこったところではますます進歩する傾向がある。これを図示すると縦軸はspecd、Aは産業革命のはじまり、Bは産業のdiffusionがおこり後進地域がジャンジャン買うからドンドン伸びる。Cはdiffusionが進んだ結果後進が進んで商売ガタキになり、specdが落ちる。

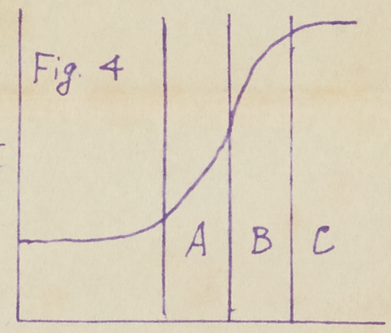
Fig. 4

Ima　併し川田の云うように、それで人口収容力が落ちるならば世界の人口分布は依然としてヨーロッパに多いことと矛盾する。だからそんなこともあるのかもしらんが、そんなに大きい現象だとはいえない。
Iin　モノポリーを失ったという事は後進国が保護関税を設けて先進を締めだしたからこそ発達したので先進国のモノポリは失われるのだ。国境があるからこそそうなると云えるのでないか。
Kaw　何れの反論もよくわかるが、もう少し聞いて欲しい。結局innovationよりもdiffusionの方が早いという点を指摘している。そして先進国では色々の事情がからんで、技術革新がむづかしくなるが後進の方はやるからにはというのでtop Classの技術から始める。しかも先進の方は開発資源の余地も減じてくる。他方生活水準が上り労賃が上る。すると資本は後進の方へ流出し、全体がdecentralizationに向う。この時に相対的優越性が薄れる。それで後進を圧迫しはじめたりする。ここにもまた資源配置の問題がきいてくる。進歩のdiffusionは主として何によって起こるか。資本の移動と、後進地のイミティション、また後進の人が有能なら学ぶ。無能なら先進の人間が入りこんでくる。何れにせよ産業は起るようになる。斯くして英国の場合もFig. 4で現わせる。Cでは最早物量でいかんので品質でコイとなる。いわば産業のelaborationで対抗することになる。しかしCのstageでも資本は後進へは動けるからモウカルが、労働者や工場は動けないからモウカランことになる。ケシカランということになる。その際は後進国の労働者がウルオウことになる。
Iin　しかし現にアメリカはもう先進国になっているからその議論は現状には合わないわけだ。
Kaw　イヤ、ところが日本がトランジスターラジオを出しはじめたようにまた他のヤツが追いついてくることが有り得る。アメリカがそれをいやがってケトバすこともあるかもわからない。
Ima　すると先進国と後進国とが循環するという循環論デスナ。
Kaw　そこでまた問題がある。今迄述べたのは合理的面で考えた。しかしこれと反対のことも起り得る。イギリスの場合は自由競争を唱えることによってトクをする方に向う。アメリカでは人口の流入を防ぐようなことをやる。何故移民反対をするかと云えば自分達の高い生活水準をなおあげるための余力をそれらに喰われて了うという恐怖、つまり先に入ったモノは既得权利を守りたがる。第2にはコライウヤツは好かんというジェラシイがある。白人優先、或いは南ヨーロッパの人はイヤがること、第3にはアメリカがnationとして成熟したがっているという事情。更には自分のところはあそこより繁栄してなければ気が済まないというような気持ちもある。後進国にはなるべくリベラルにして、自分の処の人口を先進に移したい。一方保護関税を設けて自分の産業を助長したいのに建設資材はドンドン買いたいという痛し痒しの事情がある。英国の場合をもう一度振り返る。英国が自由主義を唱えてきた時期は技術的先進性を持って居り、カツ炭田を持っており、当時はその程度の炭田でも第一級であった。更に此の時、沿岸航路はひらけた時で、国内にも水路を開いた。また植民地を得ている。これで世界は割に有機的に統一を持っていたと認められる。後進のドイツフランス等はチャショーと思い乍らも立地条件で英国にはかなわない。そこで保護経済もしたが追いつくのには輸入もせねばならなかったからがまんした。その後英国の先進性が薄れ、アメリカでは炭田が開発され、結局英国には技術的先進性だけが残された。そこで経済地理的には19世紀には英国は最早、世界の工場ではなかった。decentralizationの時期に移った。処が英国はなお優越性を保持するために先の結果として得た政治的優越性をフルに利用した。そして不利な条件をヒン曲げようとした。戦争で相手を叩き、ブロックを形成する。このブロックを作るのはhinterlandを他に喰い荒されないための措置である。そこでこんどは植民地が相対的に強くなる。例えばカナダはアメリカと取引した方が

Kyoto University

トクだが英国と結びつけとなる。その反対給付を要して独立させることとなる。オーストラリヤも同じだから20世紀に入って後の独立はアメリカ独立とは意味が違うと見る。
もひとつはアングロサクソニズム。つまり分れたのを結ぶには自分と同じものだけで移民を制限する。自分と同じモノ同志なら離れないであろう。ここでracismがでてくる。
以上と同じ理由で欧州大戦后、欧は相対的に人口過剰に陥ったといえる。大戦前は欧でも人口がドンドンふえた。そこでマルクスは嘘を云ったという事になっていたのが大戦を境に欧は世界の工場でなくなったのである。diffusion型に転じた。そこでこのover populationをやわらげることは新大陸へとなるのだが、アメリカは此の時、人口移動を止めた。アメリカへは戦前、幾何級数的に流入していく間に好況・不況の小波はあるが、年間百万入っていたこれを止めた。あたかも明治以后は繁栄の時東京へ秋田の人間など入るなと云うに等しい。これと1930年のworld panicと関係があると見ている。またブロック経済が始まる。アメリカは此の時、国として成熟したいときにあったこともあるが、もうひとつは大きな感違いをやったのである。ヨーロッパに金を貸したら、戦前通り復興するとみて、資本を投入する。ヨーロッパはそれで物を作るが一番のお得意のアメリカは売る方ばかりで買わない。当時世界一の関税ショーヘキを設けて、売ってばかりで買わなかった。一方ヨーロッパは植民地が減じ競争相手がふえていた。そこで先づヨーロッパがバテて、それがアメリカにはねかえった。だからもし、移民がドンドン入っていたら資本はアメリカ内でドンドン動いたわけだし、ヨーロッパの見込生産も下廻っていた筈である。このpanicの根本的な解決方法は、ひとつはコミュニティー間の通商をもと通りにリベラルにし、同時にpopulationの自由移動。これが理想だが、もひとつの解決はとめた人口に見合うだけの物の動きの枠づけ。これがブロック経済の意味である。ソ連は先にやってしまった。更に英米がブロックを作った。こうなると、日本や、ドイツなどの小物はブロックを作る必要にかられ乍ら、手も足も出ない。ここにヒトラーや東條が出たのである。もし日本の中で東京への人口流入をとめたら信越ブロック、東北ブロックなどが出来るだろう。そうする中にやっていけないブロックが出てくれば、それは侵略主義にならざるを得ないだろう。それと同じだ。以上で私の考えはrationalizationが根本にあり乍ら、一方で国境などというものがあってethnogenetismを誘い出し、これがrationalなものを曲げることなどが起り、必ずしも人間はrationalにのみ動けない。その結果ブロック化ということだと思う。

Iin 先の話の繰り返しになるが、後進国が先進に追いつくのは工業の方は収穫逓増の法則が働くから施設が老朽化してもやはり更新の能力がある筈。そこで後進の方がむしろ、自工業保護の目的で労働力が先進へ流れていくこともむしろチェックするだろう。先進国が人口流入を抑えることばかり強調するが、実際はいま云ったことが大きい。だから先進国が後進国に負けることが起り得る。

Kaw そういうこともあるだろう。

Iin イヤ、そういうことだと思う。後進国では技術水準が低いにかかわらず、先進国に競争できるようになる。これは相対的に人口が多い為に労賃が安いからだ。だから労働者の方は動きたいのだが、後進国自体が動かさないのだ。だから終始国境があるということで話をしてほしい。

Kaw イヤ、今日の重点はむしろ国境がなければということにある。

Iin ワタシは将来も国境はあると思う。

Kaw ソーは思わん。

Iin しかし工業が収穫逓増の性質を持つ以上そうならざるを得ない。

Kaw イヤ、ワタシはそれに疑問がある。

Iin 例えば老朽化するというが小さな企業はそれ故につぶれる。大企業は更新する力がある。

Kaw それは認めている。しかしそれは技術の先進性をうまく利用した場合である。しかし一方でdiffuseは益々容易になる。

Uey 後進国の方がむしろ国境によって保護政策をするのだから飯沼サンの考えの方がスジが通ると思う。

Ima それにdiffusionと云ってもそんなに万遍なくdiffuseするなどという事は実際には起っていない。セイゼイ日本・インドぐらいだ。

Kaw 後進国にはそれ自身の中に政情不安とか、工場を作っても国にとられる恐れとか、diffusionを起こさせない要因があるから起りにくい例があるだけで差からずdiffuseするだろう。

Ima しかし日本国内と世界に国境がない場合とのアナロジーはどうもボクには不安である。

Iin それにいまの議論でも後進国が先進国に勝つということは出てこないように思う。假りに資本を出店に出してやらすにしても出店が本店を圧倒するという事は起るまい。

Kaw 飯沼サンの御意見は結局大企業の勝ちっぱなしであるという事だ。ワタシに云わせればそうではないという事である。これはイエス、ノーの論証はむつかしい。特にワタシのは国境の無い場合の議論だからこれに対して実際は国境がある。国境はコミュニティーのエゴイズムからくる。今日は国境の無い場合で話をした。それは何故国境があればこうなるのかという事を理解するためにアブストラクトした。

Uey その趣旨には賛成なので。ただその場合での経済法則の理解において疑問がある。

Huz 世界中が一様なノッペラボーでないという事実を認めたら結局同じことになってこないか。

Ume ある地域に企業が起ったとしてそれが大きくなってくれば企業連合をもつことになるだろう。だから国境がなくても同じことをやり出す可能性がある。

Uey そうだと何故国家が必要かという事がわかる。そもそも資本主義が国家なしに出てくるかが問題だ。川長田サンはいわば国家なしの資本主義を考えている。この二つはつながるだろうか。

Iin 産業資本がそもそも初期において国家の保護のもとに育成された。これがマーカンティリズムというヤツだ。一国残らず全部そうだ。

Ima 最初に交換経済が初って、都市ができてきた時からボスが現われておさえる代りにドロボーからは守ってやる、という事があって、それが国家の初まりと見られるのだから国家のそういうキャラクターはずっとあるのだ。

Ume ドーモやはり国家なしに資本主義があったらという前提そのものがおかしい。川長田サンの議論によって国家というものの意味がはっきりしたという点がむしろ重要だ。

Kaw イヤ、梅棹サンの意見もやはりおかしい。国家が資本を育成したことは認めるが、逆にあらゆる資本がミナ国家のcontralを受けたかと云うとそれはウソだ。つまり両極端は実際は常に存在しない。そこで梅棹サンの云うように国家と資本を結びつけてしまうとそれで資本主義の発達は説明できても逆に何故国家が変更せざるを得なくなるかという変化の面

Kyoto University

は説明できなくなる。

Ume　ボクはそうでもないが。

SHi　ラショナルという点がまだよくわからん。川表田サンの云うのもラショナルかしらんが、全体を統制するというのもラショナルでないか。

Kaw　ボクはリベラル・ラショナルとも云うべきものをヨシとする。ほっておくという事はわれわれがブラブラしてることを意味しない。われわれは常に自分でplanを持って活動してやまないのである。

Ima　だからほっておけば川表田サンみたいなplan makerがでてくるかもしらん。

Ume　川表田サンのはアナーキスティックなラショナリズムだな。

Iin　レッセーフェールですか。

Kaw　だがそれでカウンターバランスがとれると思う。その反対にソ連における沿海州は依然として開発がおくれているではないか。

Uey　しかしもう少し時間を長くみる必要があろう。それにplan makingも1950年代以後はcontrolそのものが比較にならんくらい、高能率になってきている。

Kaw　そこで僕の云いたいのは電子計算器はスターリンしか使えないのかということだ。

Uey　イヤ、問題はplan makerの問題だ。

Kaw　だから吾こそは人民の代表だというウヌボレたヤツがおやりになるか、それとも人民が自ら動いたエネルギーの合成か。これがfreeです。

Uey　しかし！そんなことが出来るだろうか。

Kaw　サー、そこです。そこで上山サンや飯沼サンの説に於ける大企業がますます太るという事が疑問である。今迄は大企業が政商的になっているからだ。

Uey　しかし今ではカルテル禁止法も出来ている。

Kaw　それは知っている。それは一方で企業があまり大きくなるとかえって能率が落ちるという面も現わしているのだ。

Huz　そこで全体としてみると大きいのも小さいのもいろいろあって、両対数で直線になる、というのがAuerbachの法則です。ナラシにして了えとは誰も云ってないし、大企業ばかりにしろとも誰も云っていない。

Ima　川表田サンのは神の国ですナ。

Kaw　イヤ、大企業はますます大きくなるという一方的な見方があると思う。また実際に政商的に大きくなっているのがある。いわば不自然に大きくなっている。

Iin　イギリスに於ける植民地経営は植民地には一切工業を許さない、工業品は一切アメリカに買わす。そういうキツいコントロールがマーカンティリズムの実体でこれに対してレッセフェールが云われたのだ。そしてこの時期にはフランスでもどこでも技術そのものには変りがないから保護政策が必要。これによって原蓄をやって産業革命になる。これがマーカンティリズムの意味である。

Kaw　飯沼サンの考えは段階的に、質的に違うという立場だが、わたしのは一貫して続いてきたという面を取り上げたい。例えば政府の援助もあったかもしらんが日本の綿製品はイギリスとインドに於いて競争するところまでいった。これは必ずしも政府援助に帰することはできないと思う。

Uey　しかし、国家の出した資金は大きかった。それなしにやれたのは少い。

Iin　日本の場合、機械をあとから入れるからイギリスに比して労働の需要が少い。従って低労賃でやれる。その為農業人口はだぶついたものをそのまま温存しようとする。都会への人口の流入は事実多かったにもかかわらず事実と農業人口は依然としてだぶついていた。農村には絶えずアメをねぶらしてその状況を明治以来続けてきた。

Kaw　結局、ワタシの考えは経済においてcentralizationとそれに続いてdecentralizationが起るように、それと似たような動機を文化の方にも適応できないかと云う考えである。

Ima　川表田サンのような国境のない場合を考えるのも結構だが、事実の方では国境があるし、当分は国境をとれない。つまり地域性はなお続くものとして近き未来像というものを云がいてみて欲しい。例えばフランスとドイツとは上山サンの描いた図ではひとつになっている。しかもこのふたつは第一・第二大戦で2度も敵対した国だ。

Kaw　近い将来のブロックを考えれば北米を中心とした、パンアメリカン的なもの、アジアは資源を中心とした北支中心のもの、ヨーロッパでは炭田を中心としてアフリカ迄含む縦割りのもののうつになる。

Uey　いま炭田を中心にして割ったようだが、それ以外にエネルギーとか何か、もっと大きいもので割れないか。

Ima　ソ連はどこへいくか。

Kaw　結局ヨーロッパに含まれる。

Uey　しかし、川表田サンはソ連は東へ伸びているという指摘を先にしているし、われわれの描いた歴史的な経過の図では横に伸びているとも云える。だから横割りも考えられんか。

Kaw　それは温当な考えだが、縦割りと云っても完全なブロック化を考えることは出来ない。

Uey　しかし、沿海州が北支ブロックに入るほど縦割りがきついものだろうか。

Ima　資源の問題も大切だろうが、ボクはやはり人口の密集している地域の問題が大きいと思う。ソ連はアメリカを追い越すと云っているが、中共がアメリカ・イギリスを追い越せるか。

Kaw　追い越せない。産業の総生産は追い越せるかもしれんが、1人当りにしたらわずかのものになって了う。

Ume　その問題は重要だ。日本でも電話の数は世界で4番目くらいだが、1人当りになおしたら世界で40何位になって了う。人口数があるといくら生産をあげても駄目ということがある。

Ima　しかしアフリカなんか人口は少いが、かといって世界有数の文明国にのしあがるということも急には考えられない。

Uey　川表田サンの見方では中国が日本を含むようになるのは何時のことか。

Kaw　50年くらいだろう。北支の工業力が強くなってくると沿海州も引き込まれてくる。

Ima　中・ソ戦争が起りますか。

Kaw　当然そこでコンペティションが起る。だから中共はあんまり自分だけでのびようと無理をしないで日本と結べばよろしい。すると始めは軽工業で日本がモウケる。更に重工業で日本がウンとモウケる。ところがその次にドンデン返しがくる。そういう順序で結局、北支がブロックの中心になる。

Uey　ここでは川表田サンは自由主義国でもcontrolはやるので社会主義国と似たことになってきているというか、やはり両者は違うとも云えるのでそう簡単に中・ソが分離するとは考えにくい。

Kyoto University

Kaw　一方から云えばソ連のcontrolとは結局クレムリンへの忠誠を意味することにもなる。そこで辺地が中央に窃取されることになり易い。これがスターリン以来強くなっていって今度は地方自由化の必要に迫られるようになってきたとも云える。フルシチョフがその危険を感じたのだ。

Ima　アメリカやソ連や大きい国のことばかり云わはるから此の頃は小さい独立国がいっぱい出来ている。こんな国はどうせ太刀打ちできない。こんな国はどうなるのか。またこんな国は川喜田のそうcustraligationだけで出てくるのと違ってもっとirrationalなものを持って出てきている。こんなのはどうしたらいいのか。アメリカから借金ばかりしていたらそれでいいのか。

○　ソ連とアメリカと両方から借りたらよい。

Kaw　借金があるから上手に使えば立ちなおれる。

Ume　そんなことと違うだろう。ラオスなんて、いくらも借金できない。今でもただもらうだけ。

Kaw　それはアメリカが人向を入れない代償でそういうことをしなければならないことになっていると思う。

Ume　実際は金をやっては自国の製品を買わすようにして、結局アメリカに金が返る。これで国内産業がもうけている。ということはある。日本などもその金でもらけたわけだ。

Kaw　アメリカが金融をして日本が工業をして東南アジアが原料をおすというリンクが成立するだろう。

Ima　川喜田説ではアメリカは第一大戦後ヨーロッパに金を貸して失敗した。こんどは日本が東南アジアに金をやって失敗しないのか。

Kaw　しない。先の時はヨーロッパを自由にしておいてカツ金が返ってくるという幻想のもとにやった。借りた方アメリカへ注文するのでアメリカは繁盛繁盛と売って売ってばっかりいた。こんどはこれにコリている。だから金は棒引になってもトコトン取ろうとはしないだろう。アテにしない。

Ume　実際はアメリカの国内市場化し、アメリカ自身のメタボリズムの範囲が拡大されている。

Ima　アメリカのヒモを切って、代りに中共のヒモつきになるのはイヤだが、ともかくヒモを切って、東南アジアと組んでかなりのものになる可能性はないか。

Vey　はじめはかなり窮屈だろうがいけると思う。

Kaw　そうだと思うが、ここでヨーロッパは日本にそれをやられると困ってくる。そこでアメリカが日本に赤ハタを掲られない程度にヒモをつけている。

Vey　太西洋経済会議で割り当てようという事になっているアメリカはそこで日本を入れようとするが、イギリス始め、みなそれがイヤなのだ。

Kaw　そこで問題は現地での教育指導、毛沢東に当る仕事が大切だ。日本人が入り込んでドント養成に当らんならんが、その時日本人のカルチュアとパースナリティーが問題になる。

Vey　そうだ。日本人はデリカシーを押しつけたりする。

Kaw　それに労組の問題などもダレダレsegmentationがきっくなっている。場面の某では全体の利益になっても自分の労組に不利なら云うことをきかないなどと云いだす。日本全体が積木の集合みたいになってきている。

Ima　それはなかなかなおらない。

Kaw　これはつまりcultureの問題でもあるのでこんなcultureがアイロになっているのだ。segment精神。

Vey　縦に割るのが問題だ。

Ima　大学でもそやんけ。

Kaw　大会社でも官僚的になって、poetも年功かわずかで交換する。経験が蓄積しない。

アメリカの経済援助の問題でも始めはアメリカ人はオレタチのポケットから出してやっていると思いせがましいことを云っていた。しかしやめて見ロ。旧大陸不平等同盟がゾロゾロ連中にでてきて、われわれも喜んで赤ハタ振ってやる。大体、新大陸側が旧大陸側を締め出したから起ったことだ。当然併しなさいという説だ。

Ima　併し、移民を締め出したからという理由は反対だ。

Vey　アメリカでは経済の必要上、そうしているということは自分で認めている。

Kyoto University